

研究委員会企画シンポジウム 1

学校心理学より少人数授業を考える

企画者 樽木 靖夫 (横浜市立寺尾中学校)
相 川 充 (東京学芸大学)
司会者 樽木 靖夫 (横浜市立寺尾中学校)
話題提供者 西口 利文 (中部大学)
町 岳 (東京都大田区立調布大塚小学校)
坂本 美紀 (兵庫教育大学)
指定討論者 秋田 喜代美 (東京大学)
山口 豊一 (跡見学園女子大学)

少人数授業における教師と子どもの個別的関わり

西口 利文

少人数授業は、個に応じる積極的な手立てである(杉江, 2003)。筆者はこうした観点から、少人数授業を行う愛知県犬山市の小学校に協力を得て、4, 6年生の学級を対象に、15名規模の算数少人数授業の観察を実施してきた。

観察記録より、少人数授業のもとでは、オーソドックスな授業であっても、教師と子どもとの相互作用時間は、効率的に増えることが判明した。例えば、15分程度の個別学習時間が設けられた15人規模と30人規模の授業とを比べると、個別学習の時間内に、教師が子どもと直接関わった1人当たりの時間は、前者が後者の3倍以上になることを確認した。30人規模の授業では、教師が机間指導の際、どの子どもを指導すべきかを見極めるための「素通り」の時間が必要であった。その一方で、15人規模の授業では、所定の時間内に、ほぼ全員への指導的関わりが可能のため、見極めのための「素通り」の時間が不要だったのである。

もっとも、少人数という学習環境を、個に応じた指導のために生かすには、教師のさらなる実践の工夫が求められる。授業実践の工夫として特に重要なポイントは、一斉学習を中心とした授業形態を見直すということである。もちろん少人数の環境のもとでは、一斉学習の形態であっても、教師が子どもと関わる機会を自覚的に設ければ、自ずと個別的な関わりの機会を増やすことができる。しかし、一斉学習のもとでは、教師と子どもとの個別的関わりの内容は、あくまで学級全体を対象とした授業の流れに沿ったものとならざるを得ない。そのため、学習者のニーズに応じた関わり、特に低学力の子どもに対する十分な学習支援を施すには至らないのである。教師が個別学習やグループ学習といった形態を積極的に導入した授業を計画および実践することで、個々の学習者のニーズに応じた相互作用の機会は広がるのである。また、机の配置を「○」や「コ」の字にするといった物理的な工夫や、個別学習とグループ学習を同時並行するなど授業形態の一層の工夫により、少人数学習環境の、より効率的な活用が期待できる。

すなわち、授業の少人数化というハード面の変化に、教師による実践の工夫といったソフト面の変化を組み合わせることで初めて、少人数環境を活かした教育の実現

企画の趣旨

樽木 靖夫

第7次公立義務教育諸学校教職員定数改善計画(文部科学省, 平成13年度)により、少人数授業などきめ細かな指導を行う学校の具体的な取組みに対する支援が打ち出された。これにより、個に応じたきめ細かな指導の実施を推進し、基礎・基本の確実な定着や自ら学び自ら考える力の育成を図るため、少人数授業・習熟度別指導が推進されている。しかし、教育現場では直接的に活用できる理論や研究が見当たらないという声が多く発せられ、探索的な少人数授業が試みられた。スタートして5年を経た少人数授業は習熟別少人数授業へと移行している。このように、教育現場では大きな話題になっているが、教育心理学会ではそれに呼応するほどには研究が盛り上がっておらず、研究している会員相互のつながりもない現状である。企画者に現職教員が含まれていることから、現場教職員の要望の多い話題を提供したいと考えて研究委員会シンポとして企画した。

まず、現場に関わりながら研究を進めている西口先生より「少人数授業における教師と子どもの個別的関わり」を、次いで、現場教師である町先生より「算数習熟度別指導において、児童にクラス選択を任せられるか」を、さらに、小規模の学校に関わりながら研究を進めている坂本先生より「少人数指導の実施において教師が意識した問題点」を話題提供していただいた。その後、指定討論者である秋田先生、山口先生より、少人数授業について学習の視点、少人数授業への援助について学校心理学の視点から議論していただいた。フロアの現場教職員とも多くの議論を交わしたいと考えていたが、時間の制約もあり、討議時間の確保が十分とはいえなかった。